

17-18世紀のフランス語における 単純過去と複合過去 —手紙コーパスに基づく検討—

中川亮

(順天堂大学教育講師・東京大学大学院博士後期課程)

日本フランス語学会第352回例会

2025年9月20日(土) 於青山学院大学

本発表の概要と目的、意義

[概要と目的]

- 17-18世紀の手紙をコーパスとして、単純過去と複合過去の用法を比較し、当時の手紙における両形式の使用実態を明らかにする
- ①-④の要因ごとの頻度を分析：
 - ①主語のタイプ、②否定、③動詞の他動性、
 - ④過去時を表す時間的限定の有無
- 綴りの影響

[意義]

- 著名な作家や貴族でない、より民衆的な階層における使用の記述
- 先行研究より網羅性が高い頻度調査
- 区別に関与する複数の要因の数量的分析と綴りの影響の議論

発表の構成

1. はじめに
2. 主要先行研究の検討：
Galet (1977) ; Caron & Liu (1999) ; Jacobs (2010) ; Yao (2024)
3. 手法
4. 頻度の分析
5. 一般化線形混合モデルを用いた分析
6. 綴りの影響
7. 結論

1. はじめに：現代の状況

□現代フランス語の単純過去(PS)：ほぼ書き言葉(GGHF 2022, 619)

□ « un temps plus ou moins défectif » (Apothéloz 2021, 73)

□書き言葉ですらPSは有標 (Touratier 1996, 151)

□話し言葉のprétéritは、複合過去(PC)がふつう (Gadet 1997, 54)

□本発表はprétéritを時制ではなく意味のカテゴリーとして扱う：

The preterite category [...] subsumes events, or series of events, which took place in a period of time which is, explicitly or implicitly, wholly past (possibly the very recent past), which are not marked as being presently relevant, and which are not to be additionally aspectually marked (e.g. as durative, habitual etc.) [...]. (Harris 1982, 44-45)

1. はじめに：通時的変化

表1 ロマンズ諸語における過去を表す動詞の単純形と複合形の発達
(Harris 1982, 49-50)

段階	単純形と複合形の機能	ラFECI⇒単純形 ラHABEO FACTUM⇒複合形
Stage I	単純形：prétérit + 現在完了 複合形：過去の事態から生じた現在の状態	
Stage II	単純形：Stage Iをほぼ継承 複合形：発話時点と何らかの関連を持つ過去の事態でかつ 継続または反復アスペクトでマーク	
Stage III	単純形：prétéritに限定 複合形：現在完了を表す時制として一般化	
Stage IV	単純形：フォーマルなレジスターのみ、または消失 複合形：単純形の機能を継承	

1. はじめに：通時的変化

表1 ロマンズ諸語における過去を表す動詞の単純形と複合形の発達
(Harris 1982, 49-50)

段階	単純形と複合形の機能	古フランス語[14c初めまで] (GGHF 2022; Labeau 2022; cf. Yvon 1960 など)
Stage I	単純形：prérérít + 現在完了 複合形：過去の事態から生じた現在の状態	
Stage II	単純形：Stage Iをほぼ継承 複合形：発話時点と何らかの関連を持つ過去の事態 継続または反復アスペクトでマー	フランス語は16c-18cに Stage III⇒IV (Labeau 2022, 66-75)
Stage III	単純形：prétérítに限定 複合形：現在完了を表す時制として一般化	
Stage IV	単純形：フォーマルなレジスターのみ、または消失 複合形：単純形の機能を継承	現代フランス語(Harris 1982, 50)

1. はじめに：16c-17c前半の状況

□話し言葉におけるPSの間接的証拠(Fournier 1998, 399)

➤*Journal d'Héroard* (1601-1628) 幼少のLouis XIIIのPS (Fournier 1998, 399)

(1) je me **fi** couché hier pource que j'avoï mal au cœur

(26/12/1605, cité et souligné par Fournier 1998, 399)

(2) je **me coupi** l'autre jour au doi dan la jadin

(11/10/1605, cité et souligné par Fournier 1998, 399)

➤Molière, *Don Juan*の農夫Pierrot

(3) l'autre jour qu'il estoit assis sur un escabiau, al **fut** le tirer de dessous ly, et le **fit** choir tout de son long par tarre

(Molière, *Don Juan*, II, 1, 1665, cité et souligné par Fournier 1998, 399)

※ただしDon JuanでもPCが支配的(Dauzat 1946, 66)

※MolièreのPSは接続法半過去より少ない(Larthomas 1972, 201)

1. はじめに：16c-17c前半の状況

□PCの「結果の残存」：過去の事態Eを、意味論・語用論的に含意
Eが焦点化されれば、PSと意味的に類似
(cf. Apothéloz & Nowakowska 2010, 9；Harris 1982, 47；Nowakowska 2013, 375 など)

□PCがPSの領域に進出していたことが確認できる

➤Calvin 『キリスト教綱要』 仏語訳でラテン語prétéritに対応するフランス語PCの « utilisation prépondérante » (Schøsler 2012, 331)

➤Jean Pillot (1972 [1550]) *Gallicæ linguæ institutio, latino sermone conscripta*

単純過去と複合過去を適切に区別することは困難(f.20, p.2-f. 21, p.1)

➤Charles Maupas (1618) *Grammaire et syntaxe françoise*

いずれの時制でも「そこに違いはないことが多い」(f. 138r°)

1. はじめに：PSの衰退時期

Martin (1971, 349)

PS 中期フランス語 過去時の47.11% ➡ FM 16.57%
PC 中期フランス語 過去時の 7.74% ➡ FM 46.91%

Dauzat (1946, 68)

17c PSは民衆的(populaire)フランス語では危機的
18cになるとパリの日常的な(courant)言語から脱落

Foulet (1920, 306-307)

17c前半には平俗な(familiar)言語からは消失

Fournier (1998, 399)

17c後半から自然な話し言葉でPSが衰退し、18cには衰退が決定的

Gadet (1999, 608)

18c終わり以降から 話し言葉でPSがまれになり、PCに置き換わる

1. はじめに：17-18世紀の手紙を扱う意義

- 17c以降 PSとPCの競合に事実上決着
- ～18c後半 インフォーマルな話し言葉でPCが主流に(?)

理論・方法論的意義

利用可能な資料の中で、私的な手紙テキストは当時のインフォーマルな話し言葉に比較的近いと考えられる(Larthomas 1980, 387)

新規性

近年整備された一次資料の転写に基づく
手紙コーパスが利用可能(➡本発表の2節と3節)

2. 主要先行研究の検討

表2 検討する主要先行研究

①Galet (1977)	Sévigné夫人の手紙 フランス語
②Caron & Liu (1999)	Frantext フランス語
③Jacobs (2010)	American and French Research on the Treasury of the French Language (ARTFL) フランス語
④Yao (2024)	ARCHER (Yáñez-Bouza 2011) 18世紀 - 現代 英語 過去形PTと現在完了形PP

2. 主要先行研究の検討：Galet (1977)

- 17cの演劇テキストとの比較においてSévigné夫人の手紙を分析
- プレイヤー版**1648-1671, 1674, 1675年**の一部を使用(pp. 34-35)
- 手紙テキストは、**疑問文と感嘆文**のみ検討。**全体像は不明。**
 「discoursをすぐれて代表する文」 (pp. 396-397)

表3 Sévigné夫人の手紙におけるPSとPC (Galet 1977, 419-420)

	PS	PC
頻度	1例	61例
人称(頻度)	tu (1)	je (16), tu (27), on (3), 3pro (15)

2. 主要先行研究の検討：Caron & Liu (1999)

Sévigné夫人, Voltaire, Montesquieuなど
貴族や著名な知識人

□Frantext、17-19cの手紙文

□17cと18cは11人ずつ、19cは6人、合計28人(pp. 44-45)

□時の副詞と共起する頻度の変化を報告(pp. 43-50)

- 18c以降 hier, la veille, le lendemainはPSよりPCと共起多し
- 曜日(lundi, mardi, etc.)、le/ce + (jour, semaine, soir, etc.)も同様

□時の副詞と共起しないケースは不明

2. 主要先行研究の検討：Jacobs (2010)

ARTFLコーパス

Guez de Balzac, Sévigné夫人, Voltaire, Rousseauなど貴族や著名な知識人

□Poetry ; Treaties and Essays ; **Personal Writings(手紙含)**

□1620-1630 ; 1660-1670 ; 1720-1735

各時期2名3000語ずつのサブコーパス (pp. 256-257, 260)

□時期ごと いずれもPCはPSの4～6.7倍程度多い (p. 261)

□書き手ごと PS最多の書き手でも、PCはPSの3倍多い (pp. 263-265)

17世紀の手紙ではすでに頻度上PCは優勢？

社会的階級や教育程度が非常に高い人々**以外**ではどうか？

2. 主要先行研究の検討

先行研究の課題

①サンプリングの偏り ➡ **新コーパスの活用で対応**

②時の副詞との共起や人称との関連が断片的

③時の限定や人称以外の要因？

Yao (2024)の手法を踏襲して対応

2. 主要先行研究の検討：Yao (2024), Ch. 6

ARCHER (Yáñez-Bouza 2011) で **英past (PT)** と **present perfect (PP)** を分析

□(アメリカ vs. イギリス) × (1750-1799 vs. 1950-1999)

□PT/PPの選択に關与する要因

- ①レジスター、②時の限定の有無、③有界性(telicity)、
- ④他動性(transitivity)、⑤否定の有無、⑥主語のタイプ
- ⑦節のタイプ(主／従)、⑧先行する動詞の時制、
- ⑨交互作用(①×③)、⑩交互作用(①×④)、⑪交互作用(①×⑦)

□①-⑪の固定効果＋個人レベルのランダム効果で

一般化線形混合モデルGLMMによる分析

2. 主要先行研究の検討：Yao (2024), Ch. 6

話者jの切片 固定効果 話者j内でのデータの変動

↓ ┌──────────────────┐ ↓

$$\log \left(\frac{p_{ij}}{1-p_{ij}} \right) = \beta_{0j} + \beta_1 x_{1,ij} + \beta_2 x_{2,ij} + \cdots + \beta_n x_{n,ij} + e_{ij}$$

$\beta_{0j} = \gamma_{00} + u_{0j}$ ← 切片 β_{0j} の話者間変動 $e_{ij} \sim N(0, \sigma^2_{e_{ij}})$
 $u_{0j} \sim N(0, \sigma^2_{u_{0j}})$

p_{ij} : 話者jのデータiでPPが生起する確率

$1 - p_{ij}$: 話者jのデータiでPTが生起する確率

γ_{00} : 切片の全体平均部分

β_n : 説明変数 $x_{n,ij}$ の係数

正なら説明変数が左辺を増やす方向に働く

$x_{n,ij}$: 話者jのデータiにおける説明変数(レジスター、有界性など)

(より詳しい説明は川端ほか 2018, 119-133や久保 2012, 144-167を参照)

日本フランス語学会第352回例会 - 中川亮

2. 主要先行研究の検討：Yao (2024), Ch. 6

□ イギリス英語 1750-1799

□ 説明変数の基準を以下のように置くと

②時の限定：有、③**有界性**：非有界、

④**他動性**：自動詞、⑤否定：有、⑥**主語**：1・2人称代名詞

⑦節：主節、⑧**先行する時制**：PP,PT,現在以外の時制

(省略: ①レジスター、⑨⑩⑪交互作用)

③④⑥⑧の要因はPP/PTの選択に影響あり (p. 120)

➤⑥→3人称代名詞・その他；⑧→PT：**PTが出やすくなる**

➤③非有界→有界；④自動詞→他動詞；⑧→PP：**PPが出やすくなる**

2. 主要先行研究の検討

先行研究の課題

①サンプリングの偏り ➡ **新コーパスの活用で対応**

②時の副詞との共起や人称との関連が断片的

③時の限定や人称以外の要因？

Yao (2024)の手法を踏襲して対応

**Yao (2024)の手法を用いれば、複数の要因を同時に検討できる
Yao (2024)の説明変数は再編の余地あり（分類、再現性、解釈）**

3. 手法：コーパス

表4 使用したコーパス

コーパス	①Corpus Lettres Macintosh (一部) (Bergeron-Maguire, 2024-).	②Caillouel家コーパス (一部) (発表者による転写)
規模	110通 = 47,852語(2025年2月6日時点)	手紙82通 = およそ23,800語
書き手	98組104人、家族・親類・知人等	13組14人 家族・親類・知人等
時期	1670–1756	1686–1719
内容	17世紀–19世紀初頭に海事高等法院(High Court of Admiralty)の許可を受けた私掠船によって、他国船から押収された手紙類(Prize papers)の一部 (Bergeron-Maguire, 2021:5-6)。	17世紀末にフランスからイングランドに逃れた新教徒の商人一家Caillouel家の書簡(Nakagawa, 2023)。フランス語部分を抜粋。
データ	手作業で収集	手作業で収集

3.手法：分析手順

1) 収集したPSとPCの頻度

- 1人1通に限定し、少なくとも10例以上ある話者のみ考慮
⇒考慮した人数は32人

10～40例／人 (median = 12.5, IQR = 4.25)、計500例

- 形態・意味的にあいまいな例は除外
- 汚損などによって完全には判読できない例も除外
- PS/PCの選択と関連を持つ可能性のある要因ごとに集計

2) 一般化線形混合モデルによる分析

3) 綴りの分析

3.手法：分析手順

1) 収集したPSとPCの頻度

- 少なくとも10例以上ある話者のみ考慮、1人1通に限定
⇒考慮した人数は32人

10～40例／人 (median = 12.5, IQR = 4.25)、計500例

➤形態・意味的にあいまいな例は除外

- 汚損などによって完全には判読できない例も除外
- PS/PCの選択と関連を持つ可能性のある要因ごとに集計

2) 一般化線形混合モデルによる分析

3) 綴りの分析

3.手法：分析手順

1) 収集したPSとPCの頻度

➤形態・意味的にあいまいな例は除外

こうした例については
6節で検討

(4) Mons cher fis / Cet pour la dus sieme que je vous / ecris a pres
avoir resu deus votre que / **je resu**[PS?PC?] qui ma fet bien dus
plesir anaprnant que tus et bons sancte dieus mesi
[...] pour / votre per **je nese** [=sais] poin de nouvels

(Chaterine Bernade, le 26/02/1755, Corpus Macintosh 114)

(5) a fain **je reste**[PS?PC?IMP?PST?] 5 mois

(Françoises[sic] Joyeux, le 10/03/1745, Corpus Macintosh 106)

3.手法：分析手順

1) 収集したPSとPCの頻度

- 少なくとも10例以上ある話者のみ考慮、1人1通に限定
⇒考慮した人数は32人

10～40例／人 (median = 12.5, IQR = 4.25)、計500例

- 形態・意味的にあいまいな例は除外
- 汚損などによって完全には判読できない例も除外

➤**PS/PCの選択と関連を持つ可能性のある要因ごとに集計**

2) 一般化線形混合モデルによる分析

3) 綴りの分析

3.手法：データの分類

PS/PCの選択と関連を持つ可能性のある要因ごとに集計

□極力、客観的に分類できるものに限定

Yao (2024)が考慮していた 要因 **①手紙のみなので不要→⑨⑩⑪も除外**

~~①レジスター、②時の限定の有無、③有界性(telicity)、~~ **③客観性？**

~~④他動性(transitivity)、⑤否定の有無、⑥主語のタイプ~~

~~⑦節のタイプ(主／従)、⑧先行する動詞の時制、~~

~~⑨交互作用(①×③)、⑩交互作用(①×④)、⑪交互作用(①×⑦)~~

⑦⑧解釈？

3.手法：データの分類

PS/PCの選択と関連を持つ可能性のある要因ごとに集計

①レジスター、②時の限定の有無、③有界性(telicity)、

④他動性(transitivity)、⑤否定の有無、⑥主語のタイプ

②明確に過去時である限定(hier, 日付, quand+[過去]など)の有無

④名詞句・代名詞・que節・間接疑問・NP相当の(de+) inf.は
Transitif。それ以外はIntransitif。
間接他動詞は自動詞扱い

⑥1・2人称代名詞 vs. それ以外
PSは1・2人称代名詞とは現れにくい

(Galet 1977, 419-420; Martin 1971, 358, 388)

3.手法：データの分類

PS/PCの選択と関連を持つ可能性のある要因ごとに集計

□性別、地域、年齢、書かれた時期 は区別しない

➤属性がはっきりしないケース(特に地域と年齢)

➤Fisherの正確確率検定(R, ver. 4.5.1)

- 性別 F/H (N=480) : 有意差なし(Holm補正後の $p = 1.0000$)
- 時期 17c/18c(N=492) : 有意差なし(Holm補正後の $p = 1.0000$)

※性別については不明や連名の手紙を除いた

3.手法：分析手順

1) 収集したPSとPCの頻度

- 少なくとも10例以上ある話者のみ考慮、1人1通に限定
⇒考慮した人数は32人

10～40例／人 (median = 12.5, IQR = 4.25)、計500例

- 形態・意味的にあいまいな例は除外
- 汚損などによって完全には判読できない例も除外
- PS/PCの選択と関連を持つ可能性のある要因ごとに集計

2) 一般化線形混合モデルによる分析

3) 綴りの分析

3.手法：データの分類

3) 一般化線形混合モデルによる分析

R (ver. 4.5.1), blmeパッケージを使用

```
fit1 <- bglmer(tense ~ subject2 + temp_spec_pst + negation  
              + transitivity + (1|sender),  
              data = df_sub,  
              family = binomial(link="logit"),  
              fixef.prior = normal(cov = diag(2^2, 5)),  
              cov.prior = NULL)
```

tenseは
PS = 1
PC = 0
右辺が正ならPSが
出ると予測

※固定効果の**negation**で疑似完全分離が生じる影響を制御するため事前分布を設定してある(cf. Clark *et al.* 2023)

3.手法：分析手順

1) 収集した**PS**と**PC**の頻度 → 4節

2) 一般化線形混合モデルによる分析 → 5節

3) 綴りの分析 → 6節

4. 頻度の分析

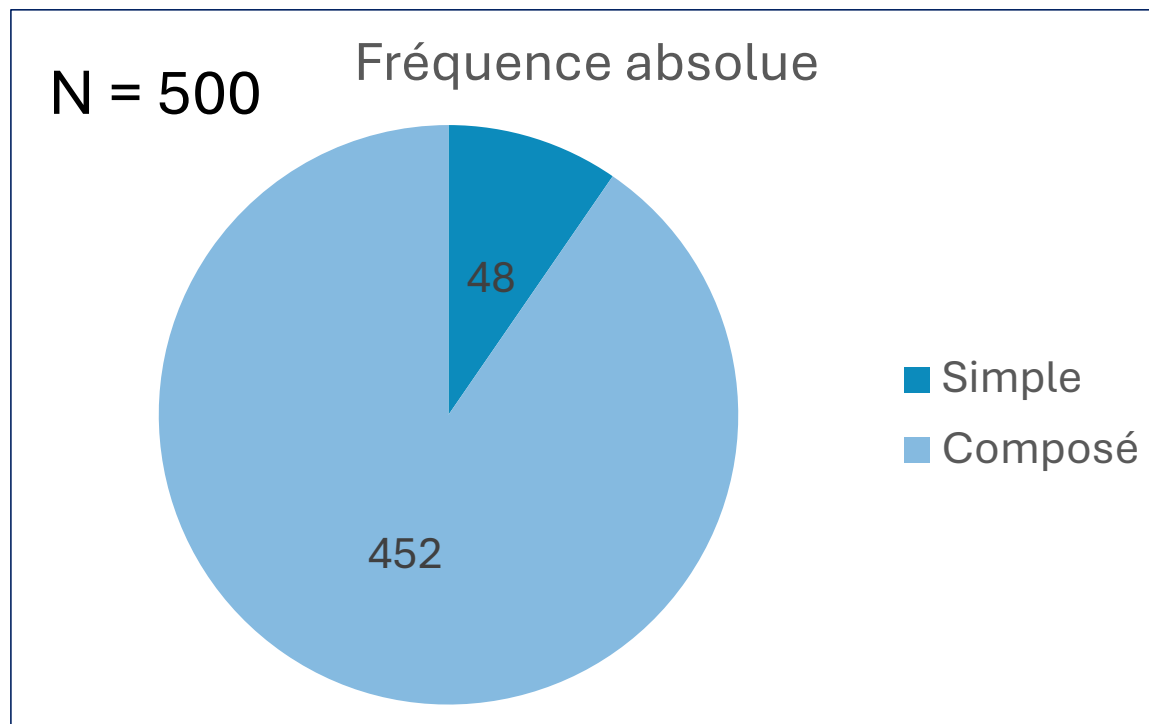


図1 PSとPCの頻度

- PCがPSの10倍程度多い
- Jacobs (2010)では最大で6.7倍ほどの差

※10例未満の話者を含め、かつ同一話者について複数の手紙からのデータ収集を許すと N = 1271。分布の傾向はあまり変わらない。

4. 頻度の分析

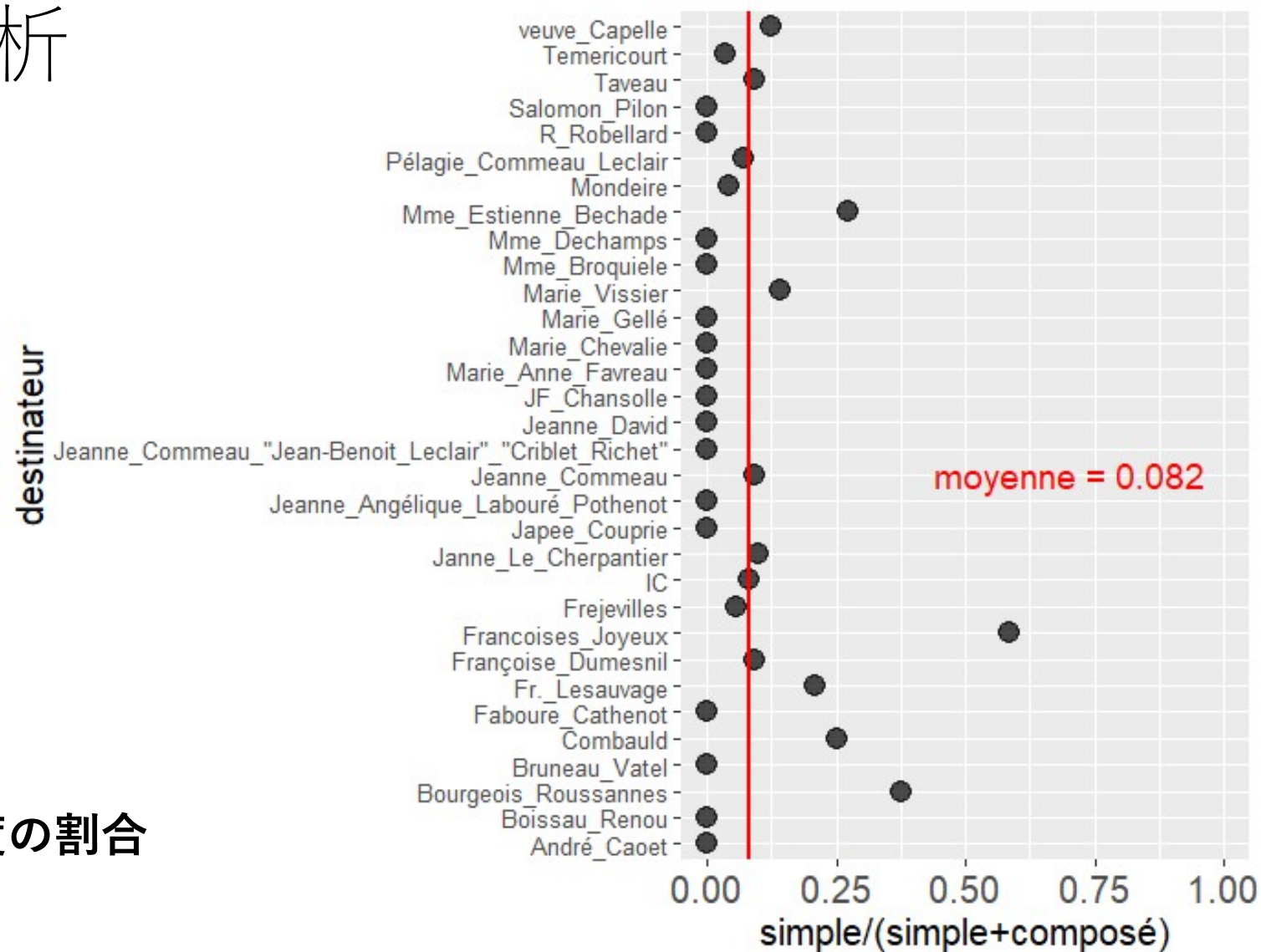


図2 書き手ごとの頻度の割合
PS/(PS+PC)

4. 頻度の分析

N = 500

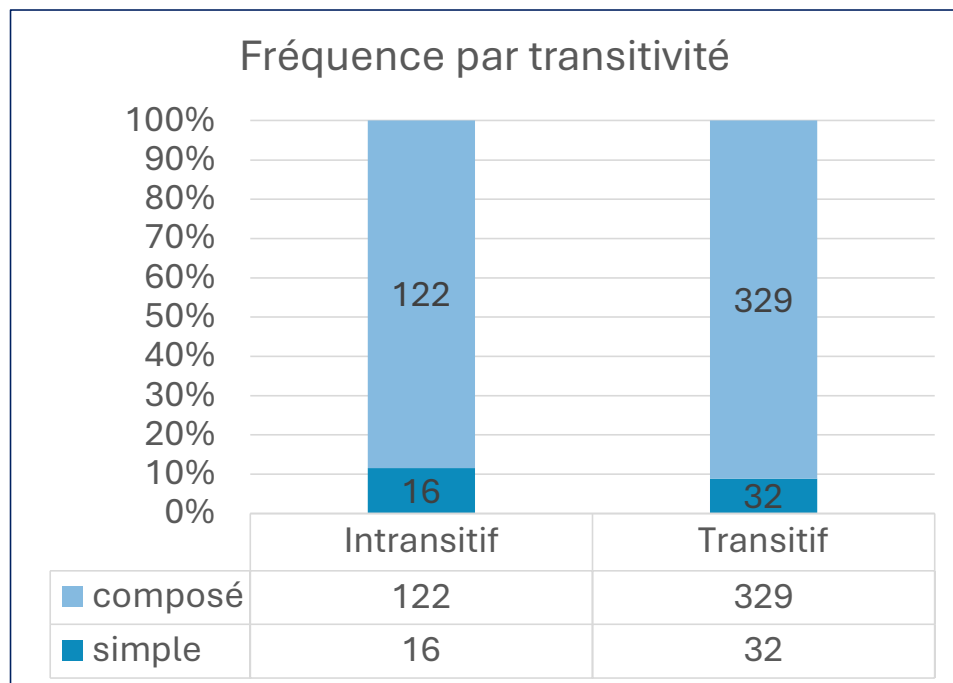


図3 動詞句の他動性ごとの頻度

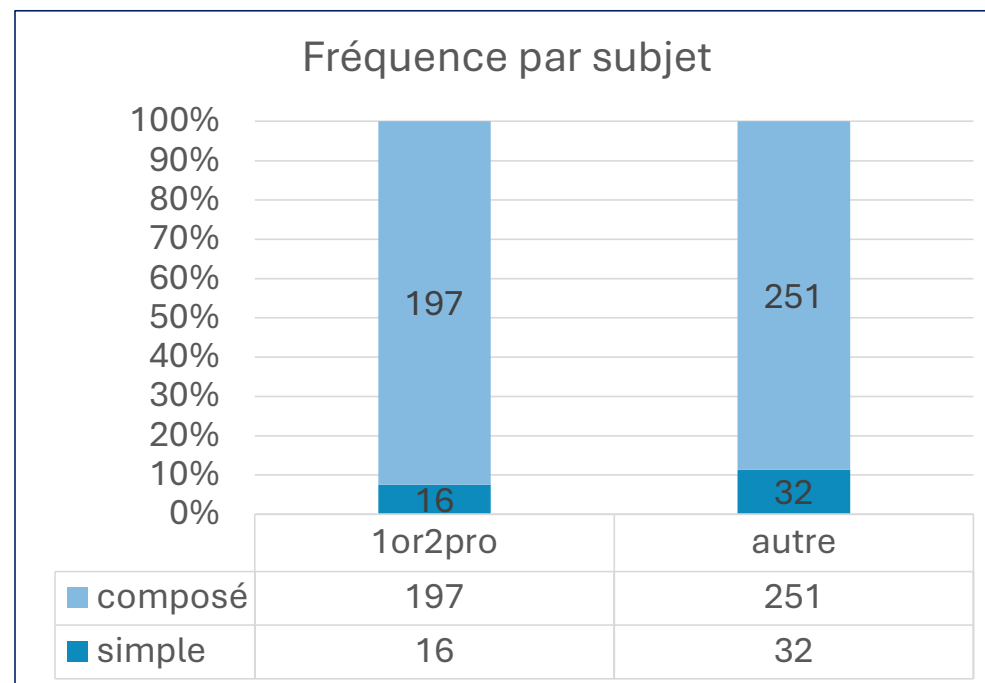


図4 主語のタイプごとの頻度

図3と図4では、あまり差がないように見える

※分類不能の例を除外したため、図3・図4では合計が500にならない。

4. 頻度の分析

N = 500

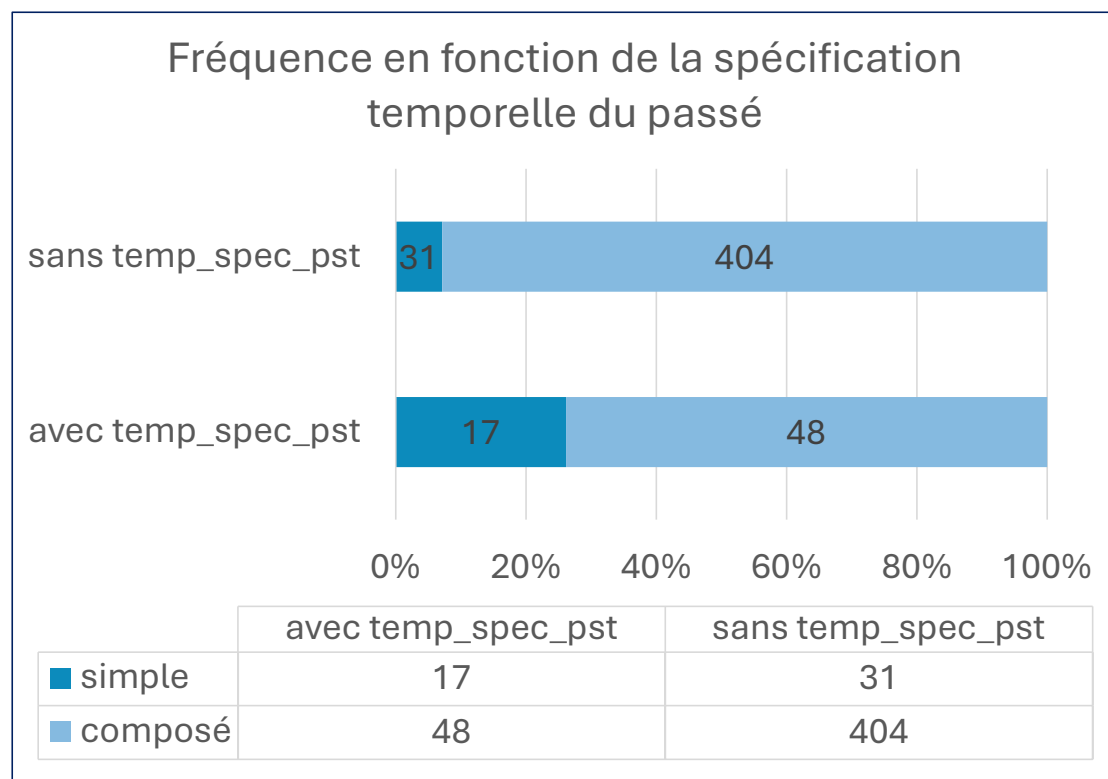


図5 過去時を表す限定の有無ごとの頻度

- PSとPCの現れについて
フィッシャーの正確確率検定
Holm補正後の $p = 8.476 \times 10^{-5}$
- 過去時の限定を伴うのは500例中
65例(13%)しかない

4. 頻度の分析

N = 500

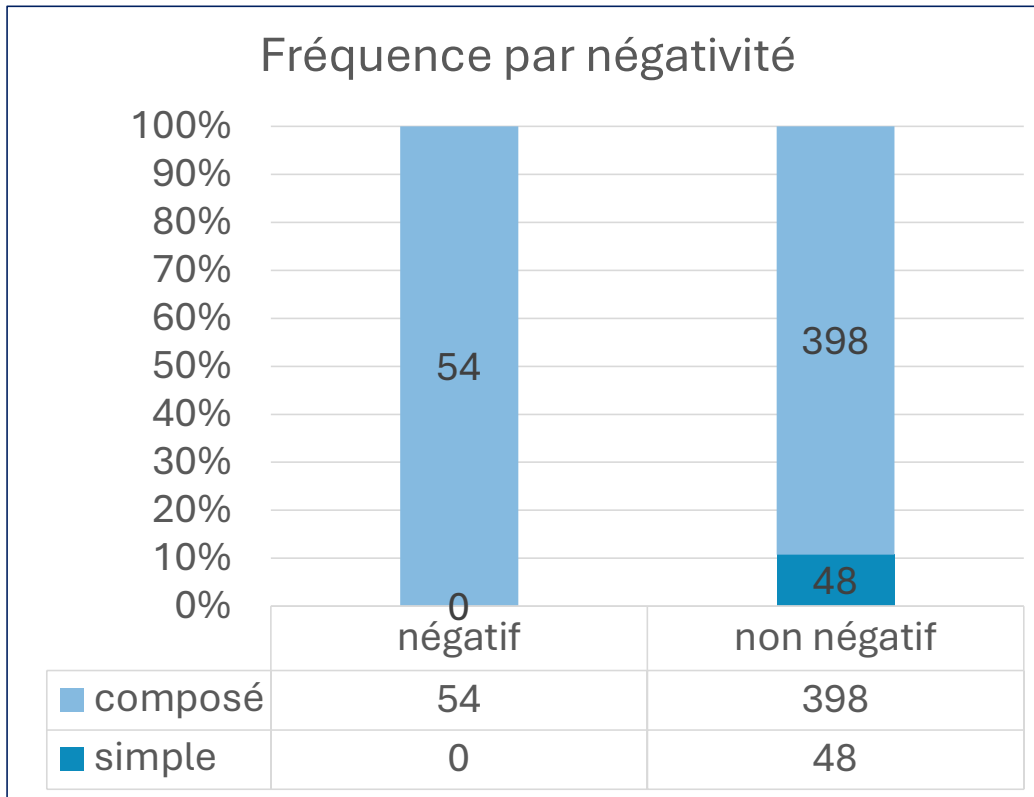


図6 否定の有無ごとの頻度

□ PSとPCの現れについて

フィッシャーの正確確率検定

Holm補正後の $p = 1.6875 \times 10^{-2}$

□ 否定文ではPCしか現れない

➤ Je ne reçus pas votre lettre

「あなたの手紙は受け取っていません」

のような例はない

➤ 現在完了の否定でPSが使われることは
ない

⇒ PSの現在完了用法は手紙では衰退したか

5.一般化線形混合モデルを用いた分析

表5 GLMMの結果

N (occ.) = 495 N (sender) = 32	Estimate	Std. Error	Z value	Pr (> z)	VIF	オッズ比
Intercept	-2.8039	0.4963	-5.649	1.61×10^{-8}		
subject 1, 2人称代名詞	-0.6529	0.3845	-1.698	0.089496	1.00	0.52
temp_spec_past あり(1)	1.5637	0.4208	3.716	0.000203	1.00	4.78
negation あり(1)	-2.4637	1.1021	-2.235	0.025393	1.00	0.09
transitivity transitif(1)	-0.4753	0.3867	-1.229	0.219053	1.01	0.62
決定係数 $R^2(\text{cond.}) = 0.524$, Adjusted ICC = 0.435						

※分類不能のセルが含まれるデータを除外したため総計500とならない

5.一般化線形混合モデルを用いた分析

表5 GLMMの結果

N (occ.) = 495 N (sender) = 32		Estimate	Std. Error	Z value	Pr (> z)	VIF	オッズ比
Intercept		-2.8039	0.4963	-5.649	1.61×10^{-8}		
subject		負：説明変数がすべて基準ラインならPCが出やすいと予測					
1, 2人称代名詞		-0.6529	0.3845	-1.698	0.089496		0.52
temp_spec_past あり(1)		1.5637	0.4208	3.716	0.000203	1.00	4.78
negation あり(1)		-2.4637	1.1021	-2.235	0.025393	1.00	0.09
transitivity transitif(1)		-0.4753	0.3867	-1.229	0.219053	1.01	0.62
決定係数 $R^2(\text{cond.}) = 0.524$, Adjusted ICC = 0.435							

- ❑過去時の限定ありならPS/PCのオッズが少し上がる($\text{Pr}(>|z|) < 0.05$)
- ❑否定ありならPCがかなり出やすい($\text{Pr}(>|z|) < 0.05$)

5.一般化線形混合モデルを用いた分析

表5 GLMMの結果

N (occ.) = 495 N (sender) = 32	Estimate	Std. Error	Z value	Pr (> z)	VIF	オッズ比
Intercept	-2.8039	0.4963	-5.649	1.61×10^{-8}		
subject 1, 2人称代名詞	-0.6529	0.3845	-1.698	0.089496	1.00	0.52
temp_spec_past あり(1)	1.5637	0.4208	3.716	0.000203	1.00	4.78
negation あり(1)	-2.4637	1.1021	-2.235	0.025393	1.00	0.09
transitivity transitif(1)	-0.4753	0.3867	-1.229	0.219053	1.01	0.62

決定係数 $R^2(\text{cond.}) = 0.524$, Adjusted ICC = 0.435

❑主語が名詞句や3人称代名詞の時と比べて、1, 2人称代名詞だと、PS/PCのオッズが少し下がる(ただし $\text{Pr}(>|z|) > 0.05$)

❑他動性の影響について、 $\text{Pr}(>|z|) > 0.05$

6. 綴りの影響

□文字素<e>と<ai>の音価があいまいな例：すべて1人称

(6) = (4) Mons cher fis / Cet pour la dus sieme que je vous / ecris a pres
avoir resu deus votre que / **je resu[PS?PC?]** qui ma fet bien dus
plesir anaprnant que tus et bons sancte dieus mesi
[...] pour / votre per **je nese [=sais]** poin de nouvels

(Chaterine Bernade, le 26/02/1755, Corpus Macintosh 114)

□1人称単数PSと過去分詞の語尾が/-y/となる動詞

(7) **jai ne** / point resu [PC] pas une detes nouvelle depuis le 3 avril 1744

(8) **je ne poves** [IMP] mi re sourdre

(9) alor **je** / resus[PS?PC?] le sacremant il me restait encore que que /
petite operance e pour masurai du fait **jai** demandé[PC] / a monsieur
fenolo si contait que (Francoises[sic] Joyeux, le 10/05/1745, Corpus Macintosh 106)

6. 綴りの影響

□文字素<e>と<ai>の音価があいまいな例：すべて1人称

(6) = (4) Mons cher fis / Cet pour la dus sieme que je vous / ecris a pres
avoir resu deus votre que / **je resu**[PS?PC?] qui ma fet bien dus

□当時は手紙が無事届いたことを伝える必要があった⇒je + recevoir

□je reçusをPC、j'ai reçuをPSとして読む余地

⇒ PSをPCとして読んでもいい

□<e>/<ai>のゆれ

例) <plaisir>/<plesyr>, <jamais>/<james> (cf. Cazet & Parussa 2022, 243)

□綴り字改革者たちは/e, ə, ε/を区別(Biedermann-Pasques 1992, 1680179, 396)

□jeの母音(Ø, シュワー, 前舌母音)の変異は別途調査が必要。

(Francoises[sic] Joyeux, le 10/05/1745, Corpus Macintosh 106)

6. 綴りの影響

□文字素<e>と<ai>の音価があいまいな例：すべて1人称単数
1人称単数PSおよび過去分詞が/-i/となる動詞(とくに*dire*)

(10) appris auoir Receu La Vostre Jefus [PS] voir monsieur / Lemery
a qui Je dis [PS ... ou PRÉSENT ou PC?] qu'ayant obtenu
sentence de Renuoy en possession de Vos / biens

(F[r.] Lesauvage à “Monsieur Isaac Caillouel”, le 17/08/1690, Huguenot Library
F/CA/18/38)

手紙文では、書き手や書き手の周囲の人物の発話を伝達するために、動詞*dire*も比較的よく用いられた

6. 綴りの影響

□綴りの上でPSと現在形が区別されない例

3人称単数PSおよび現在形が/-i/となる動詞(とくに*dire*)

(11) Hoche / **Vint** [PS] hier chez nous il me dit [**PS ... ou PRÉSENT**]
quils sestoient accommodes ensemble quon Leurs / Redonnoit
vne petite mesure

(F[r.] Lesauvage à “Monsieur Isaac Caillouel”, le 17/08/1690, Huguenot Library
F/CA/18/38)

6. 綴りの影響

□綴りの上でPSと現在形が区別されない例

3人称単数PSおよび現在形が/-i/となる動詞(とくに*dire*)

(11) Hoche / **Vint** [PS] hier chez nous il me dit [**PS ... ou PRÉSENT**]
quils sestoient accommodes ensemble quon Leurs / Redonnoit
vne petite mesure

(F[r.] Lesauvage à “Monsieur Isaac Caillouel”, le 17/08/1690, Huguenot Library
F/CA/18/38)

□仮に書き手が過去の事態を伝えるために*dire*のPSを使っているとしても、現在形として読むこともできる (演劇における類似現象: Larthomas 1980)

□3人称単数のPSの一部はPSとして読まれない可能性があった(Martin 1971, 399)

7. 結論(1)

- 新たな手紙コーパスにおけるPS/PCの分布を明らかにした。
- PCはPSの10倍ほど頻繁。
- PSは否定文では現れない。
- 過去時の限定があればPSは現れやすくなるが、過去時の限定があるのは少数(全体の13%)。
- 人称と他動性はあまり影響しないか。
- 他の要因があるかもしれない。

7. 結論(2)

- 文字素<e>と<ai>の音価のあいまい性が1人称単数**PS**の衰退に寄与した可能性。
- 3人称単数で**PS**と現在形が区別できないケースが**PS**の衰退に寄与した可能性。
- 本研究のデータが民衆のインフォーマルな話し言葉をある程度反映しているなら、17世紀後半には**PS**が彼らの日常的な言語からかなり払しょくされていた可能性が高い。これは、Fournier (1998)とGadet (1999)の推定よりも早く、Foulet (1920)やDauzat (1946)の見解を支持する。

参考文献

- Apothéloz, D. (2021), “Les temps verbaux : (I) temps simples, (II) temps composés”, in *Encyclopédie Grammaticale du Français*. DOI : <https://nakala.fr/10.34847/nkl.0dbdpyf5>, <https://nakala.fr/10.34847/nkl.c93em866> (2025年8月13日 アクセス)
- Apothéloz, D. & M. Nowakowska (2010), “ La résultativité et la valeur de parfait en français et en polonais”, *Cahiers Chronos* 21, 1-23.
- Benveniste, É. (1966), *Problèmes de linguistique générale*, Paris, Gallimard.
- Bergeron-Maguire, M. (2021), “[D]es navir qui ne vienderons poien ta la pointe’ : quelques témoignages remarquables pour l’histoire de la liaison en français”, *Revue de linguistique romane* 85, 75-99.
- Bergeron-Maguire, M. (2024-), Corpus Macintosh, CLESTHIA/Sorbonne Nouvelle. <https://lettres-outr-mer.huma-num.fr/> (2025年9月11日 アクセス)
- Biedermann-Pasques, L. (1992), *Les grands courants orthographiques au XVII^e siècle et la formation de l’orthographe moderne*.
Tubingue, Max Niemeyer.
- Bybee, J. L., R. D. Perkins, & W. Pagliuca (1994), *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect and Modality in the Languages of the World*.
Chicago, University of Chicago Press.
- Caron, P. & Y.-C. Liu (1999), “Nouvelles données sur la concurrence du passé simple et du passé composé dans la littérature épistolaire”, *L’information grammaticale* 82-1, 38-50.
- Caudal, P. & C. Vettters (2007). “Passé composé et passé simple : Sémantique diachronique et formelle”, *Cahiers Chronos* 16, 121-151.
- Cazel, Y. & G. Parussa (2022). *Introduction à l’histoire de l’orthographe* (2^e éd.), Paris, Armand Colin.
- Clark, R. G., W. Blanchard, F. K.C. Hui, R. Tian & H. Woods (2023), Dealing with complete separation and quasi-complete separation in logistic regression for linguistic data, *Research Methods in Applied Linguistics* 2-1, article 100044. DOI : <https://doi.org/10.1016/j.rmal.2023.100044> (2025年9月12日 アクセス)

参考文献

- Comrie, B. (1976), *Aspect*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Dauzat, A. (1946), *Études de linguistique française* (2^e éd.), Paris, Éditions d'Artrey.
- 出水孝典 (2023) 『語彙アスペクトと事象構造（上）：時間特性を診る14章』 開拓社.
- Fleischman, S. (1990), *Tense and Narrativity: From medieval performance to modern fiction*, Austin, University of Texas Press.
- Foulet, L. (1920), “La disparition du prérérêt”, *Romania* 46, 271-313.
- Fournier, N. (1998), *Grammaire du français classique*, Paris, Belin.
- Gabay, S., J. Barré & F. Cafiero (2025). “The times are a-changin’: présent vs passé simple in French novels (1811-2024)”, *DH Benelux* 2025発表資料. <https://doi.org/10.5281/zenodo.15386698> (2025年9月8日アクセス)
- Gadet, F. (1997), *Le français populaire* (2^e éd. corrigée), Paris, PUF.
- Gadet, F. (1999), “La langue française au XX^e siècle : L'émergence de l'oral”, in J. Chaurand (ed) *Nouvelle histoire de la langue française*, Paris, Seuil, 581-671.
- Galet, Y. (1977), *Les corrélations verbo-adverbiales, fonction du passé simple et du passé composé, et la théorie des niveaux d'énonciation dans la phrase française du XVII^{ème} siècle* (Vols 1-2), Thèse de doctorat, Université de Paris X, Lille/Paris, Atelier reproduction des thèses, Université de Lille III/Honoré Champion.
- GGHF = Marchello-Nizia, C., B. Combettes, S. Prévost & T. Scheer (eds) (2020), *Grande grammaire historique du français* (Vols 1-2), Berlin, De Gruyter Mouton.
- Harris, M. (1982), “The past simple and present perfect in Romance”, in N. Vincent & M. Harris (eds) *Studies in the Romance Verb: Essays Offered to Joe Cremona on the Occasion of his 60th Birthday*, London, Croom Helm, 42-70.

参考文献

- Jacobs, M. (2010), “Problems and procedures in the construction of diachronic corpora: a case study of the *passé composé* and *passé simple* in Classical French”, in F. Neveu, V. Muni Toke, J. Durand, T. Klingler, L. Mondada & S. Prévost (eds) *Congrès Mondial de Linguistique Française - CMLF 2010*, Paris, Institut de Linguistique Française, 249-275. DOI: <https://doi.org/10.1051/cmlf/2010230> (2025年8月18日アクセス)
- 川口順二 (1994) 「フランス語の成立と書き言葉」 『フランス語研究』 28, 52-60.
- 川端一光・岩間徳兼・鈴木雅之 (2018) 『Rによる多変量解析入門：データ分析の実践と理論』 オーム社.
- 久保拓弥 (2012) 『データ解析のための統計モデリング入門：一般化線形モデル・階層ベイズモデル・MCMC』 岩波書店.
- Labeau, E. (2022), *The Decline of the French Passé Simple*, Leiden, Brill.
- Larthomas, P. (1972), *Le langage dramatique. Sa nature, ses procédés*, Paris, Armand Colin.
- Larthomas, P. (1980), “Note sur l’emploi des temps dans *Le Neveu de Rameau*”, *Travaux de linguistique et de littérature* 18-1, 387-394.
- Lindschouw, J. (2013), “Passé simple et passé composé dans l’histoire du français : changement paradigmatique, réorganisation et régrammation”, *Revue de linguistique romane* 77, 87-119.
- Lindschouw, J. & L. Schøsler (2016). “Parfait ou aoriste ? Problèmes liés à l’identification des valeurs”, *Cahiers Chronos* 28, 175-198.
- Liu, Y.-C. (1999), *Du français classique au français contemporain. Permanence et évolution dans la systématique des temps verbaux de l’indicatif : le cas de la littérature épistolaire* (Vols 1-2), Thèse de doctorat, Université de Limoges.
- Machida, K. (1988), La disparition du passé simple en français, *Studia Romanica* (Societas Japonica Studiorum Romanicorum) 21, 31-42.
- Martin, R. (1971), *Temps et aspect. Essai sur l’emploi des temps narratifs en moyen français*, Paris, Klincksieck.
- Maupas, C. (1618 [¹1607]), *Grammaire et syntaxe françoise* (2e éd.), Orléans, Chez Oliuier Boynard, Et lean Nyon, au Cloistre Ste. Croix. (B. Colombat et J.-M. Fournier (eds) *Corpus des grammaires françaises du XVIIe siècle*. Classiques Garnier Numérique, <https://classiques-garnier.com/corpus-des-grammaires-francaises-du-xvii-e-siecle.html> (2022年5月15日アクセス)

参考文献

- Ménard, P. (1976), *Syntaxe de l'ancien français* (Nouvelle éd. entièrement refondue), Bordeaux, Sobodi.
- Moignet, G. (1976), *Grammaire de l'ancien français. Morphologie – syntaxe* (2^e édition revue et corrigée), Paris, Klincksieck.
- Nakagawa, R. (2023), “Les temps simples et composés du passé en français et en anglais dans *Grammaire françoise / French Grammar* de Claude Mauger (1684)”, *Studia Romanica* (Societas Japonica Studiorum Romanicorum) 56, 63-78.
- Nowakowska, M. (2013), “Combien y a-t-il de passés composés en français ?”, in A. Grabowska, J. Graca & L. Smutek (eds), *Problemy współczesnej neofilologii. Wybrane zagadnienia*, Tarnów, Państwowa Wyższa Szkoła Zawodowa w Tarnowie, 373-383.
- Pillot, J. (1972 [1550]), *Gallicae linguae institutio, latino sermone conscripta...*, Genève/[Paris], Slatkine/[Champion]. Bibliothèque nationale de France, Gallica, <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k4584f> (2025年04月06日アクセス)
- Posner, R. (1997), *Linguistic Change in French*, Oxford, Clarendon Press.
- Roy, J. (2014), *The Perfect Approach to Adverbs. Applying variation theory to competing models*, Ph.D. thesis, University of Ottawa.
- Schøsler, L. (2012), “Sur l’emploi du passé composé et du passé simple. « ... ayant reçu de voz nouvelles, ie communicquay avec luy, et la conclusion fust telle que je vous ay mande ... »”, in C. Guillot, B. Combettes, A. Lavrentiev, E. Oppermann-Marsaux & S. Prévost (eds) *Le changement en français : Études de linguistique diachronique*, Oxford, Peter Lang, 321-339.
- Touratier, C. (1996), *Le système verbal français (Description morphologique et morphématique)*, Paris, Masson & Armand Colin.
- Van Herk, G. (2002), *A Message From the Past: Past Temporal Reference in Early African American Letters*. PhD thesis submitted to the University of Ottawa.
- Van Herk, G. (2008), “Letter perfect: The present perfect in early African American correspondence”, *English World-Wide* 29-1, 45-69.
- Van Herk, G. (2010), “Aspect and the English present perfect; What can be coded?”, in J. A. Walker (ed) *Aspect in Grammatical Variation*, Amsterdam, John Benjamins, 49-64.
- Wilmet, M. (1976), *Études de morpho-syntaxe verbale*, Paris, Klincksieck.

参考文献

Yáñez-Bouza, N. (2011), ARCHER past and present (1990-2010), *ICAME Journal* 35, 205-236.

Yao, X. (2014), “Developments in the use of the English present perfect: 1750-present”, *Journal of English Linguistics* 42-4, 307-329.

Yao, X. (2024), *The Present Perfect and the Preterite in Late Modern and Contemporary English. A corpus-based study of grammatical change*, Amsterdam, John Benjamins.

Yvon, H. (1960), “Emploi dans la *Vie de saint Alexis* (XI^e siècle) de l'imparfait, du passé simple et du passé composé de l'indicatif”, *Romania* 81, 244-250.

統計ツール

R Core Team (2025). R: A Language and Environment for Statistical Computing (ver. 4.5.1). R Foundation for Statistical Computing. Vienna: Austria. <https://www.R-project.org/>.

ご清聴ありがとうございました。

謝辞

本研究はJSPS科研費課題番号25K22986「近世・近代のフランス語手書き文書に見られる綴り字の社会言語学的研究」(代表者：中川亮)の助成を受けたものです。

統計的分析に関してHadrien Charvat氏(順天堂大学)に助言を頂きました。記して感謝申し上げます。すべての誤りは発表者の責任によるものです。